

# VERITAS vos liberabit



鹿児島純心女子  
大学附属図書館報  
第5号(No.5)  
編集：図書館運営委員会  
発行日：2016.3.14

## 特集 書物の味わい

図書館報名「VERITAS vos liberabit」は、ラテン語で「真理はあなたたちを自由にする」(新約聖書ヨハネ福音書8章32節)という意味です。

### contents

巻頭言	1
館長 三間 晶生	
Book Review	2
Nicholas WALTERS	
有村 玲香	
山崎 智子	
松元圭太郎	
(こと文4) 有村美奈子	
(こども3) 小池 恭子	
(健栄1) 門松 真衣	
(看護2) 應戸 優希	
USER'S voice	6
(大学院) 向田 亮	
図書館とわたし	
仙波 玲子	
お知らせ	8
編集後記	

### ■巻頭言

図書館長 三間 晶生

図書館が便利で使いやすく身近なものになっている。

東京の小さな大学に入ったのは1970年前半。小中高と図書館とは無縁で、本と言えばマンガと教科書、参考書だけ。大学に入り授業の参考にと何回か大学の図書館に行ったが、大学図書館の敷居の高さに辟易して近寄らなかった。

当時、図書館は閉架式で、本はどこか利用者の見えないところにあった。タンスの引き出しのようなものの中に入った図書目録カードを一枚一枚繰って目当ての本を探し、その分類番号、作者、書名等を図書請求用紙に書いて係に提出。係が書架に行行ってその本を探してカウンターにもってきてくれるまでしばらく待つという、何か厳かな儀式のようだった。欲しい本が分からないときは、何百もある図書目録カードをばらばら繰って、自分の探している内容の本を書名から想像して見つけようとした。必要な本がなければあきらめるか、電車を乗り継いで迷いながら国立国会図書館まで行き、また同じようなプロセスで本を請求して読んだ(他図書館から取り寄せてくれる図書館相互貸借システムがあったかもしれないが、知らされてなかった)。不便で根気がいった。館内は全体的に薄暗くしわぶきもはばかれる静かさで、田舎から出てきた新生人には威圧的だった。大学という最高学府の図書館にある人類の英知の詰まった本は、軽い

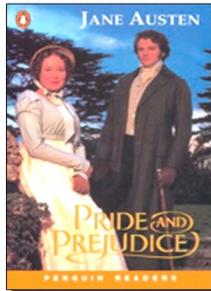
気持ちで利用されては困る、それだけの覚悟をもって心して向かえ、という雰囲気であった。すぐに面倒になり図書館から足が遠のいた。自分のまわりでも図書館を利用している友人はあまりいなかったし、だいたいみんな本は自分で買って読んでいた。

最近の図書館は様変わりしてユーザーフレンドリーだ。例えば本学の図書館は開架式で自由に書架に入り一冊一冊自分で手に取って選べ、本の傷み具合でその人気度も分かり自分も一読をと思ってしまう。レファレンスカウンターもオープンでフレンドリーだし、適切なアドバイスもしてもらえる。とにかく全体がオープンで明るいのがいい。冷暖房完備だが、おしゃれなオリジナルの膝掛けやうちわまで準備されている。論文や本もPCを使えばあっという間に探索できるし、館内になれば他から取り寄せてもくれる。便利で気軽に使え、至れり尽くせりで、利用者にとっては天国だ。しかしながら、キーボードをたたいて本の検索をしていると、自分の前に何人もの人が触れたであろう図書目録カードのあの紙の感触をふと思い出して懐かしんでいるアナログの自分がある。が、今の方がずっとよい。



# Book Review

When you think of 19<sup>th</sup> century English Literature, one name will surely stand out and that is Jane Austen. Although living most of her life towards the end of the 18<sup>th</sup> century, her works were not published until the early 19<sup>th</sup> century. People will disagree about which of her novels is the best, but almost all will agree that a strong contender is *Pride and Prejudice*. Certainly for me, it is not only my favourite Austen novel, but probably one of my favourite novels of any author.



## *Pride and Prejudice*

Jane Austen  
Pearson Education

図書館所在  
指定図書 837.7 AU 他

writes about two other ideas: pride and prejudice. In some way, each of the main characters the story have either pride or prejudice or both. But although they think they can see these things in others, they can't see it in themselves.

Because of this, they make mistakes and misunderstand people. Perhaps, though, the point Austen is making is that it's important to not only understand the character of other people but also your own character – its strengths and weaknesses. In the story only two people begin to really understand themselves and as a result find the possibility of love and happiness.

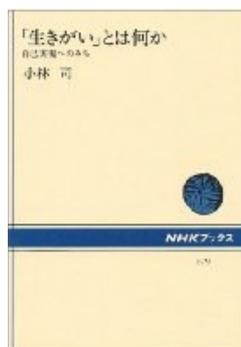
In some ways, the story is very simple. It's about marriage, and desire to get married to someone and, in some cases, anyone! The focus is mainly on one family called the Bennets. This family is not particularly rich but they are content in most things. There is a problem though, and that is Mr and Mrs Bennet have five daughters and no son. The story explains what happens to three of these daughters, and focuses particularly on one, Elizabeth Bennet.

Besides the theme of marriage, Austen also

Perhaps, the story sounds complicated and very serious but it isn't. In fact, it's very easy to read (and reread) and funny too. Please enjoy reading this book. You can read it as the original, in Japanese or as a Penguin Graded Reader.

ことばと文化学科 Nicholas WALTERS

看護学科へ入学すると、「看護の対象は人間である」と学びます。看護を学ぶ者には「人間を理解すること」を求められます。人間を理解するためにお勧めしたいのが『「生きがい」とは何か』です。「生きがい」という言葉を知らない人はいないでしょうし、日常会話で普通に使用する言葉です。



## 『「生きがい」とは何か：自己実現へのみち』

小林司著  
NHKブックス

図書館所在  
1F和書 159 KO

「生きがい」について考えたことがない、または自分の「生きがい」について語れない人が、他人の「生きがいのある生活」につながる援助ができるのでしょうか？

「生きがい」って何だろうと思った人は、一度この本を手がかりに、「生きがい」について考えてみましょう。きっと今より自分を理解できるようになると思います。そして人間をより深く理解できる人になっていると思います。

今まで、自分の「生きがい」についてじっくり考えたことがありますか？意外に自分の「生きがい」を考えてみたことがないという人は少なくないかもしれません。自分の

看護学科 山崎智子



エリック・カールの『はらぺこあおむし』は、学生の皆さんの幼き頃に保護者や保育者に何度も読み聞かせのリクエストをした1冊ではないでしょうか。



『はらぺこあおむし』  
エリック・カール  
偕成社

図書館所在  
1Fえほん 726.6 CA

「大小の概念」の獲得に役立つストーリーです。また、お月様やお日様に目や鼻が描かれたキャラクターは、「アニメズム」と言われる幼児期に「全てのものに生命や

意識がある」という考えに合わせて擬人化されています。

この絵本は、カラフルな色使いやおおむしが卵から蝶になるまでの日々を描いた子どもに大人気の名作です。この絵本を大人になってから手に取ると、非常に発達の観点に富んだ内容であることに気付きます。

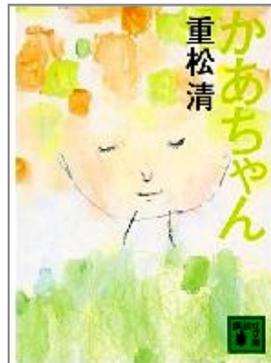
その他にも、おおむしが食べる果物の数が1つずつ増えていく数の概念等、こども達の発達に役立つ優れた教材とも言えます。

「小さい」卵からかえった、「ちっぽけ」なおおむしは、やがて止まらない食欲により、「大きくて太っちゃ」へと成長します。この過程は、大体2歳6ヶ月頃の発達において

少し、お時間があるときにもう一度『はらぺこあおむし』を手に取り、絵本を「読んでもらえる側」から「読んで聞かせる側」の立場で、目を通してみてはいかがでしょうか。

こども学科 有村玲香

「久しぶりにお気に入りと呼べる本に出会えた。重松清氏の『かあちゃん』である。この作品では、同僚と共に交通事故死した父に代わり、同僚の家族への償いを永年継続している年老いた母の話をきっかけに、「ゆるすこと」・「ゆるされること」とは何かをテーマとした、10組の母と子の物語が紡がれている。いじめによる自殺未遂事件に関係した中学生、学校の先生およびその母親達が登場人物である。過去のいじめ事件と真剣に向き合うことで、加害者や被害者、担任の先生も成長していく様が、各々の家族が抱えている問題や親子関係を絡めながら語られていく。著者は「ゆるすこと」・「ゆるされること」に対して、登場人物に「ゆるされるため」でなく、自分の過ちを反省し、同じ過ちを繰り返



『かあちゃん』

重松清著  
講談社

さないために、都合の悪い過去を忘れずに覚えておくことが、償うことである」と語らせている。私自身が本作を気に入ったのは、このテーマに対してでもあるが、登場する母子の互いに対する想いに共感したからである。互いの想いがすれ違い、うまくいかない親子関係。「親の心子知らず」であり、「子の心親知らず」である。私も親となり親側の想いがわかるが、子供の想いもわからなくでもない。すれ違う親子にもどかしさを感じ、はらはらしながらも、最終的には親子の絆にほっとし、母親の愛情に心が安らいだ。ドラマチックな展開があるわけではないが、読んだ後に親に対して素直になれるような気がするとともに、心が温くなる作品である。学生の皆さんにも是非読んでもらいたい。

健康栄養学科 松元圭太郎



# 学生の皆さんによるBook Review



## 『水妖記 (ウンディーネ)』

フーケー作  
岩波書店

「恋する者にとっては、与えるよりも享ける事が幸いな  
のだから、その際あなたの享けたものが分け与えた  
ものよりも多かつたならば、あなたは幸福である。」  
(フーケー『水妖記』柴田治三郎訳 岩波文庫)

これはドイツの作家フリードリヒ・フーケーが、1811年に発表した小説『ウンディーネ(Undine)』に登場する言葉だ。『ウンディーネ』は水の精霊ウンディーネと騎士フルトブラントとの恋の悲劇を描いた、幻想的で美しい物語である。

騎士フルトブラントはとある人里離れた岬で、老いた漁師の夫婦と、老夫婦の養子である不思議な少女ウンディーネと出会い、彼女と恋に落ちる。次の日から大水が起って彼は漁師の家を立てなくなるが、滞在の間にウンディーネと仲を深めていき、彼女との結婚を決意する。ウンディーネはフルトブラントに、自分の正体は水の精で、大水などの不思議な出来事も自分の一族の仕業だったと打ち明けるが、フルトブラントは変らぬ愛を誓い、ウンディーネを妻として町へ連れ帰る。

町ではフルトブラントを慕う貴婦人ベルタルダが彼を待っていた。ベルタルダとウンディーネとは打ち解けた仲となり、フルトブラントたちはベルタルダとともに自分の城に引きこもってしまう。

城で生活するうち、フルトブラントはベルタルダに再び惹かれていく。ウンディーネはベルタルダの窮地を救うことで一時フルトブラントの愛を取り戻すが、その後、ドナウ川で水の精から様々な悪戯を仕掛けられ、ついにフルトブラントは「水の上でウンディーネを叱ってはいけない」という精霊界の掟を破ってしまう。ウン

ディーネは掟に従い、嘆きながら水の中へ帰っていく。

物語は幻想的な情景描写で進められ、どこかゴシックホラー的な雰囲気をもっているともいえる。水の精、すなわちウンディーネには魂がなく、愛によって魂を得ること、そして水の精と人間の禁断の恋、これはこの物語の大きな核で、悲しい結末にも大きく関わっている。フーケーは中世の錬金術師パラツェルススの「ニンフの物語」や、彼自身が幸せに出来ずに終わってしまった悲しい結婚の体験を元にこの物語を書いたとされている。

ウンディーネは作中前半と中盤からでは、大きく性格が変わり、初めは明るく自由奔放で無邪気に振る舞うが、フルトブラントと結ばれてからは人が変わったようにおとなしい女性となる。ウンディーネの変化の様子も、物語のみどころといえるだろう。無垢で素直なウンディーネはとても可愛らしい。また、この物語は単なる男女の悲恋物語というわけではなく、「人間が魂をもつというのはどういうことか」という、哲学的な観点からも描かれているように思われる。

ここで冒頭の引用に戻るが、「恋する者にとっては、与えるよりも享ける事が幸いである」ならば、悲劇とされがちなウンディーネとフルトブラントの恋も、ウンディーネにとっては悲劇であっても、フルトブラントにとっては幸せなことではないだろうか。婚姻によって魂を得たことで愛し、愛される両方の喜びを知ったウンディーネは、フルトブラントが心変わりをしてでも彼に対して変わらぬ愛情を持ち続けた。彼は、自分がウンディーネに注いだ以上の愛情を彼女から受け取っていたのだ、決して悲しい物語ではないだろう。物語の最後、定めにより、愛する人であるフルトブラントの命を自らの手で奪わなければならなくなってしまったウンディーネの気持ちを考えると胸が痛む、切ない恋の物語である。

ことばと文化学科4年 有村美奈子



『それでも私たちは教師だ：  
子どもたちと共に希望を紡ぐ：ドキュメント津波と原発災害の地、福島で』  
白木次男著  
本の泉社

図書館所在  
1F和書 370.4 SH

今私たちが住んでいる国、日本は、地震大国と呼ばれ、戦後幾度となく地震が起きています。近年にも、阪神淡路大震災、新潟県中越地震、そして、2011年3月11日に東日本のみならず、日本全土、世界各国を震撼させた巨大地震、東日本大震災が起こりました。この震災によって発生した大津波は、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に大きな被害をもたらし、日本全土、世界各国の人々に、とても大きな衝撃と恐怖をもたらしました。そんな中、福島第一原子力発電所では、全電源を喪失し、大量の放射性物質の放出を伴い、原発地域周辺に住んでいる人々は長期避難を強制され、離散した家族も少なくありませんでした。

この本は、その巨大地震と大津波、福島第一原子力発電所過酷事故を経験し、自然豊かなふるさとや、温もりのある地域社会の繋がりなど、多くのものを一度に失っ

てしまった人々の声や思い、その後の歩みについて詳しく書かれたものです。

震災後、津波によって家を失ってしまった子や大切な家族を失ってしまった子、やむを得ず仕事の都合で離散した家族を思い続ける子や、学校再開が叶わず、親友と離ればなれになってしまい悲しんでいる子の声や思いが、忠実にリアルに書かれています。

子どもたちは放射能汚染を恐れ、心に何の準備もなく不安や悲しみを抱いたまま突然、遠くは北海道、沖縄まで、県内外への避難を余儀なくされました。やむを得ず避難してきた子どもたちの中には、状況や事態が未だに理解できず、受け入れられずに苦しんだり、先の見えない未来に怯え、不安や恐怖を抱いている子もいました。そんな中、自分には何が出来るだろうかと考え、懸命に働いた教師である筆者の体験談と、震災後の学校が再開するまでの経緯や教育の工夫、子どもの心のケアについてのことが段階的に綴られており、子どもたちの作文や声も取り上げているため、分かりやすく読みやすいです。

この本を読んだことで、友達、親戚、知人との別れの寂しさや、震災によって失ったものの大きさと悲しみ、憤り、ボランティアなどの支援の温かさ、人と人との関わりの大切さや友情、家族の絆、地域の人々との繋がり、なくした命、生きている命の尊さを改めて感じ、私たち一人一人に一体何ができるのかについて改めて考えさせられました。是非とも読んでいただきたいおすすめの本です。

こども学科3年 小池 恭子



『キケン』  
有川浩著  
新潮社

図書館所在  
1F文庫 913.6 A

99%男子校の成南電気工科大学のサークル「機械制御研究部」、略称【キケン】。世界一有名な爆弾魔が渾名の部長上野直也と大魔神の大神宏明率いるこのサークルは部にまつわる様々な事件から機研=危険と認識されていた。この本は【キケン】の黄金期にまつわる様々な出来事を描いた本である。

初めてこの本を読んだとき笑いがとまりませんでした。犯罪スレスレ、ちょっと間違えばマッドサイエンティストの部長に率いられ、無茶苦茶な大学生活が始まる。何事にも全力で取り組みながらバカをやっている男の子たちの話を読んでいいなと思う人もいます。新入生勧誘からちょっとした恋のお話、学祭のことやロボット相撲大会など、どれも笑いが必須のお話。「キケン」は当時一回生の元山の回想ではじまります。妻はその話を聞き、元山に学祭にいと誘います。しかし元山にとって【キケン】は大切な思い出。だからこそ行きたくない。そこがもう自分達の場所じゃないと理解したくない。—それでも、その時間があつたからこそ今につながっている。そう思った元山は妻をつれて母校に帰ることを決意するのでした。

男子にしか共有できない世界をぜひ覗いてみませんか？

健康栄養学科1年 門松 真衣



## 『サファイア』

湊かなえ著  
角川春樹事務所

図書館所在  
1F文庫 913.6 MI

湊かなえさんの「告白」を読んで、私は、この「湊かなえ」という作者が気になっていた。違う作品を読んでみたく、「サファイア」を手を取った。

このサファイアという作品は、短編集となっており、「真珠」「ルビー」「ダイヤモンド」「猫目石」「ムーンストーン」「サファイア」「ガーネット」と各作品に宝石の題名とその宝石に関連付けられた物語が書かれている。

甘酸っぱい青春の話をする男女、しかし、その雰囲気は違和感にあふれている【真珠】。家の裏にできた老人福祉施設とその最上階に住む おいちゃん との不思議な交流【ルビー】。ある日、雀の命を救った男、その夜、「私は、昼間の雀です」鶴の恩返しならぬ、雀の恩返しが始まる【ダイヤモンド】。3人家族それぞれに幸せに暮らしている家族、ある日、隣の猫を救ったことから家族の秘密が明らかになっていく【猫目石】。優しくした夫が暴力を振るうようになった、妻は夫を殺害した【ムーンストーン】。二十歳の誕生日には指輪がほしいな。人生初のおねだりの先に待っていたものとは【サファイア】。サファイアのその後の物語【ガーネット】

私が印象に残っているのは【猫目石】である。最後まで

読み終わった後の何とも言えない感覚。読後感の悪さ、でもそこに引かれた、「え？ここで終わり？」と読み返した作品は猫目石以外ない。まったく予想していなかった展開で、私は秘密が暴かれたのち、家族で修羅場とかすことを想定し読み進めていったのだが、展開は予想を裏切り静かに終わってしまう。「えー…」と言ってしまった。でも、一番印象に残っているのだ、「記憶に爪痕を残された」気分である。

私が好きな作品は【サファイア】と【ガーネット】である。ガーネットはサファイアのその後を描いている。この2つがセットでお気に入りである。どちらか片方ではお気に入りにならなかったであろう。とてもいい男が登場するのだ、こんなにも優しく紳士な男はいないであろうというくらい男で最初は詐欺師かと思ったほどだ、その男と主人公の女性が出会い、恋に落ち、初めて心を開くといった流れになったところで心を開いた最初で最後の人と文章が続きフラグが立った。「まさか、彼が詐欺師でこの主人公が騙されてしまう…」と考えたのはこのいい男が死ぬというシナリオを考えなくなかったからだ、その後、主人公の彼女はどうか生きていくのか。恋する気持ち、心が削がれるほどの悲しみ、さみしさがダイレクトに伝わる作品である。読んだ後の「はあ…」という感覚は胸がいっぱいになった。

時間軸、主体、関係を上手く表現し、自然と次の展開を推理してしまう。「まさか」が当たった時にはニヤリとしてしまう。予想もしていない展開や真実が明らかになった時には「まじか、まじか、やられた」とニヤリとしてしまう。それでいてとても読みやすい作品だと思いました。

看護学科2年 應戸 優希

## 「行ってみる」事から始める図書館

大学院 向田 亮

図書館にはインターネットによる予約や検索機能があり、時間をかけて自分で探さなくても、自分にとって必要な本が決まっており、タイトルがわかっている場合は速やかに手続きを済ませる事ができます。活用したい本の種類はわかっている場合、あるいは本からの知識を利用したいが、どのような本がよいかわからない場合、図書館に直接訪れ、手に取って見てみる事で、自分が求める本と出会える事もあります。



この直接図書館に訪れるというのが、ハードルが高いという方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

しかしハードルが高いという方にとっても、純心女子大学の図書館は他の図書館とは少し違っているかもしれません。また図書館に行く事でいつもとは違う少し面白い出来事に出会うこともあります。例えば、私が以前図書館を利用した際、入口の近くでカニを見かけました。この大学ではよくカニが現れるということを知らなかった私は大変驚きました。不思議に思いながら図書館の中に入ると、それを見ていた受付の男性職員の方が声を掛けて下さ

# User's

# 図書館とわたし

\*図書館の役割が変わっても\*

ことばと文化学科

仙波玲子



最近、大学図書館に納本された『世界の美しい図書館』（パイ インターナショナル）を見ていると、機能性とデザインの調和がとれた現代的な図書館の魅力もさることながら、荘厳で華麗な閲覧室に立派な背表紙が整然と並ぶヨーロッパの歴史ある図書館に目を引かれる。わけても、オーストリアのメルク修道院の図書館は、2つの閲覧室の豪華さ美しさに言及されているのだが、それだけでなく、この図書館は中世文学史において果たした役割においても特筆される。イタリアの文学者ウンベルト・エーコは、中世の修道院を舞台にした書物を巡るミステリアスな小説『薔薇の名前』を書いた。その中で、彼が主人公の一人にメルクの名を与えたのは、このベネディクト会派修道院の図書室には多くの写本が集められ、写字室では多くの写本が制作されていたことに因んだのであろう。コピー機などというものがなかった中世の時代、本は人の手によって一冊一冊筆写され、美しく装丁された。この時代、本は高価であり字を読める人も少なく、本を読むということは数少ない人間に許された特権であった。

読書が普及するきっかけになったのはグーテ

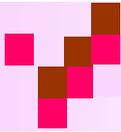
ンベルクの活版印刷術の発明である。安価な本が大量に作られ、やがて公立図書館が相次いで設立され、誰もが手軽に読書ができるようになった。そのグーテンベルクの印刷術に匹敵するメディア革命が現代のインターネットだ。所蔵図書館に足を運ばなくとも、貴重な本を世界中どこでも読める時代になってきた。筆者も最近その恩恵にあずかった。本学国際文化研究センター発行の『新薩摩学10』に川内縁の僧侶菅了法について書いた。思想家で教育者でもあった菅はグリム童話集の本邦初訳者として名を残す人物なのだが、その翻訳書『西洋古事神仙叢話』はというと、現在所蔵する公立図書館が数館にとどまるとされる稀覯書だ。面倒な手続きを踏まないと読めないかと思っていたら、所蔵館の一つである国立国会図書館がデジタル化してインターネットで公開していた。わざわざ東京の図書館に行かずとも鹿児島県の自宅に居ながらにして、劣化を恐れることなく明治20年出版の本を読むことができたのである。先進技術に感謝し、便利な時代になったものだとつくづく思った。しかしその一方で、iPadでテキストを読んでいると何とも味気ない思いにとらわれた。頁めくりのアニメーションが加えられていても、紙の手触りが無いと、ずしりとした本の重みを感じられないと、本を読んだという実感がわからないのである。そして、長い年月薄暗い書庫に眠る本を図書館の閲覧室で待つ間の高揚感に欠けるのである。メルク修道院の閲覧室の写真を見ていると、本を書いた人、作った人々、そしてその本を伝えてきた人々の思いを感じる。そのような歴史の重み、人肌のぬくもりはデジタル時代になっても忘れたくない。

## Voice

いました。「入口にカニが…」と説明すると、すぐに入口の方に向かい、対応して下さいました。その間に本を借り、再び受付に向かうと、男性職員さんが「カニさんは残念ながらお亡くなりになりました…(´・ω・`)」と少し残念そうにしながら、丁寧に教えて下さいました。私も「そうでしたか…」と言いつつ、心の中では「カニさん」という可愛い表現をされたことに少しほっこりしてしまいました。今でも顔を見ると、「カニさん」が頭をよぎる事があります。

図書館の利用自体は少しハードルが高いかもしれませんが、職員の方に声をかけることで、図書館のイメージも変わるかもしれません。まずは図書館に行ってみてはいかがでしょうか。





## お知らせ

- 図書館内であれば、どこにでも持ち運べるiPadを用意しました。ご利用下さい。
- 学外文献複写申込用紙には通し番号を付与していますので、図書館に備え付けのものを利用して下さい。コピーして使わないようにお願いします。パソコンからの申込は従来通り行うことができます。
- 文献検索ガイダンスは随時受け付けています。個人でもグループでの申込みも可能です。レポートや卒業論文作成に役立ちますので、早めの受講をお勧めします。

## 図書の配架場所の変更を行っています

参考図書は貸出ができないこともあり、コーナーを設けて別置していましたが、そのためか、利用されない図書も多くあります。いろんな資料を手にとっていただきたいので、一般図書と同じ書架に並べ、一箇所のブラウジングで一般図書も参考図書も目に触れることができるようにしました。参考図書はこれまで同様貸出はできませんが、是非手に取ってご覧ください。多くの図書が利用されることを願っています。

### 卒業後も利用できます

在学時より利用制限はありますが、貸出も可能です。ご利用下さい。（\*貸出冊数5冊、貸出期間2週間）  
大学に来られたら、まず大学の受付で入館の手続きを行って下さい。その後、図書館へお越しください。皆様のご利用をお待ちしています。

## 編集後記

今回は、寄稿して頂いた原稿で、ほぼ紙面が埋まってしまった。とくに図書紹介は、どんな風に作品を読み、何を感じ、考えたか、書物の味わい方が見事に描かれていて面白い。本を手にとり、本と向き合ったリアルな感覚が伝わってくる。ところで、文献を資料として研究している者からすると、現物を手にしないとわからないこと、現物を手にしたからこそ見えてくるということがしばしばある。電子データではなく、本を手にしたからこそ受ける知的刺激というものがある。そもそも書棚の背表紙を見ただけでも、知的好奇心が触発されるものだ。加えて本館は、職員の方々のホスピタリティに満ち溢れている。本の貸借を通じたリアルな人間関係を、本館はとても大切にしている。本館でしか味わえないリアルな知的世界を、一人でも多くの学生に味わってもらえればと願ってやまない。  
(KH)



鹿児島純心女子大学附属図書館報

*VERITAS vos liberabit* No.5

編集・発行：図書館運営委員会

発行日：2016年3月14日

〒895-0011

鹿児島県薩摩川内市天辰町2365番地

TEL：0996-23-5311 / FAX：0996-23-5030

E-mail: veritas@jundai.k-junshin.ac.jp